

社会学「近代とは何か」
メディアスクーリング

担当 徐玄九

8

逆説としての近代

—マックス・ウェーバーの近代形成論—

前回のまとめ

古代から中世までの労働觀の変遷を大まかにいえば、古代ギリシャの〈呪われた災禍〉としての労働觀にはじまり、神からの罰としての労働、そして宗教的義務としての労働を経て、倫理的問題としての労働へと変化した。このような変遷を経て近代になると、労働はすべての義務と美德を集約する行為として高く位置づけられた。

今回の主題

マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を概観しつつ、前回取り上げた宗教改革期の労働觀の変化と特徴を補いながらマックス・ウェーバーの「近代形成論」を取り上げる。彼によれば、「近代(社会)」は或る特殊な宗教的に動機づけられた人間的エネルギーの社会的放出の「思わざる結果」として成立したという。

KEYWORD

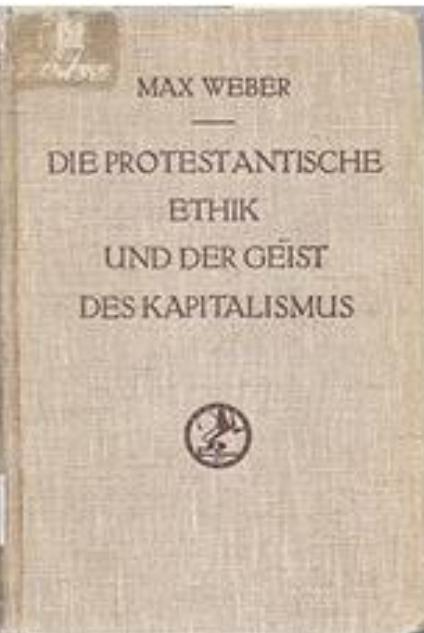
宗教改革

二重予定説

プロテスタンタント

宗教的個人主義

天職(beruf)



マックス・ウェーバー (Max Weber 1864–1920)
ドイツの社会学者

この論文は、『社会科学と社会政策のアルヒーフ』(1904/05年号)に発表し、後に自らがまとめた『宗教社会学論集 第1巻』に改訂・収録された。この論文発表後、『世界宗教の経済倫理』という、中国、インド、ユダヤをあつかった膨大な宗教社会学の研究を行なった。この論文はこうした宗教社会学研究の出発点となった論文であり、かつ彼の論文でもっとも有名な論文である。

プロテスタンティズムの 倫理と資本主義の精神

マックス・ウェーバー著

大塚久雄訳



営利の追求を敵視するピューリタニズムの経済倫理が実は近代資本主義の生誕に大きく貢献したのだという歴史的逆説を完明した画期的な論考。マックス・ウェーバー(1864–1920)が生涯を賭けた広大な比較宗教社会学的研究の出発点を画す。旧版を全面改訳して一層読みやすく理解しやすくするとともに懇切な解説を付した。



白 209-3
岩波文庫

1 問題の提示

- ①統計をみると、「近代の大商工業における資本所有や経営、高級労働にかかわりをもつプロテstantの数は相対的にきわめて大きい」ことがわかる。
- ②そこから「一方の非現世的、禁欲的で信仰に熱心であるということと、他方の資本主義的営利生活に携わるということと、この両者は決して対立するものなどではなくて、むしろ逆に、相互に**内面的な親和関係**にあると考えるべきでないか」と問い合わせを立てる。

2 近代資本主義の精神

「倫理的な色彩をもつ生活の原則という性格を持ち、あたかも労働が絶対的な自己目的であるかのように『天職Beruf』に励み、正当な利潤を組織的かつ合理的に追求するという心情」

2-1 ベンジャミン・フランクリンの思想

「資本主義の精神」を、古典的といえるほど純粋に包含していると思われる例として、ベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin、1706-1790)の思想を取り上げる。

- ・時間は貨幣だということを忘れてはいけない。
- ・信用は貨幣だということを忘れてはいけない。
- ・貨幣は繁殖し子を生むものだということを忘れてはいけない。
- ・支払いのよい者は他人の財布にも力をもつことができる—そういう諺があることを忘れてはいけない。・・・
- ・すべての取引で時間を守り法に違わぬことほど、青年が世の中で成功するために役に立つものはない。・・・
- ・長きにわたって支出も収入も正確に記帳しておくのがよい。

「単なる処世術ではなく、自分の資本を増加させることを自己目的と考えるのが各人の倫理的な義務だという思想」=「一つのエトス(Ethos)」の表明

2-2 「エーツス(Ethos)」とは何か。

一般的に「精神構造」ないし「倫理規範」を指すが、折原浩は次のように説明している。

「エーツス」とは、正直・勤勉・規律といった徳目が、倫理規範として(あるいは建前として)掲げられ、説かれるだけではなく、当人の生き方そのものに溶け込んで、習慣とも「実践的機動力 praktischer Antrieb」ともなっている、そういう意味で「身につき」、「血となり肉となった」生活原則として「一個人の生き方全体を規制する」ものを指す。

(折原浩『マックス・ヴェーバーとアジアー比較歴史社会学序説』平凡社、2010年、41-42頁)

2-3 「資本主義精神」に充たされた人々の態度

「休みなく奔走することの『意味』を彼ら（「資本主義精神」に充たされた人々）に問い合わせて、そうした奔走のために片時も自分の財産を享受しようとしない態度は、純粹に現世的な生活目標から見ればまったくの無意味ではないかと問うとき、彼らは、もし答えるとすれば、『子や孫への配慮』だと言うこともあるだろう。しかし、より多くは、…より正確に、自分にとっては不斷の労働を伴う事業が『生活に不可欠なもの』となってしまっているからなのだ、と端的に答えるだろう。これこそ彼らの動機を説明する唯一の的確な解答であるとともに、事業のために人間が存在し、その逆でない、というその生活態度が、個人の幸福の立場からみるとまったく非合理的だということを明白に物語っている。」（79-80頁）

【参考】近代ヨーロッパの資本主義成立以前の伝統主義的労働觀

営利活動とか利潤追求とかは、倫理的にも無関係なこと、いやむしろ倫理に反する、不道徳なことと考えられてきた。

*古代ヘブライ人の労働＝「原罪としての労働」→「契約としての労働」

**初期キリスト教のパウロは、金銭へのこだわりを一切の惡の根源として告発し「それゆえ食と衣があれば、それだけで十分満足すべきだ」と説く。

***聖フランチエスコも、労働は「大変にきつい肉体を使っての辛い労働に限られるべきであり、しかも自分には日々の糧を手にし、恵まれない他者に施すいくらかの金子を稼ぐ以外には目的をもってはならない」とされた。

安江孝司『古代から現代への労働觀の変遷』労働調査協議会、1997年、参照

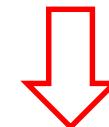
このように、古今東西のさまざまな倫理・道徳を見渡すと、「営利追求」はおおかた、なにか「卑しいこと」あるいはさらに「諸惡の根源」として、否定的に評価されてきた。ところが、「(近代)資本主義の精神」にかぎっては、まったく逆で、「営利追求」に、プラスの価値符号が付けられ、「職業義務」として、そのかぎり「自己目的」ないし「至上命令」として、各人に課せられている。

世俗的な目的を追求する合理性すれば、現在を犠牲にしてまで、利潤の追求を義務とする精神は、きわめて倒錯的で非合理的に映ったに違いない。

資本主義以前の経済労働	資本主義以後の経済労働
<p>「できるだけ多く労働すれば一日どれだけの報酬が得られるか、ではなくて、…伝統的な必要を充たすには、どれだけの労働をしなければならないか、…どうすればできるだけ楽に、できるだけ働くかないで、しかもふだんと同じ賃銀がとれるか」</p>	<p>労働が絶対的な自己目的（「天職Beruf」）であるかのように励むと同時に、利潤の追求を倫理的義務とする生活態度</p>

「呪われた黄金の飢餓」

「資本主義以前の人々には、不可解かつ不可思議であり、また不潔で軽蔑すべきものとしか思われないことがらだ。人間が生涯にわたる労働の目的として、莫大な貨幣と財貨を背負って墓に下ることをひたすら考えつづけるといったことは、彼らには倒錯した衝動、つまり「呪われた黄金の飢餓」の産物と考えるほかに、説明の方法がないからだ。」(81頁)



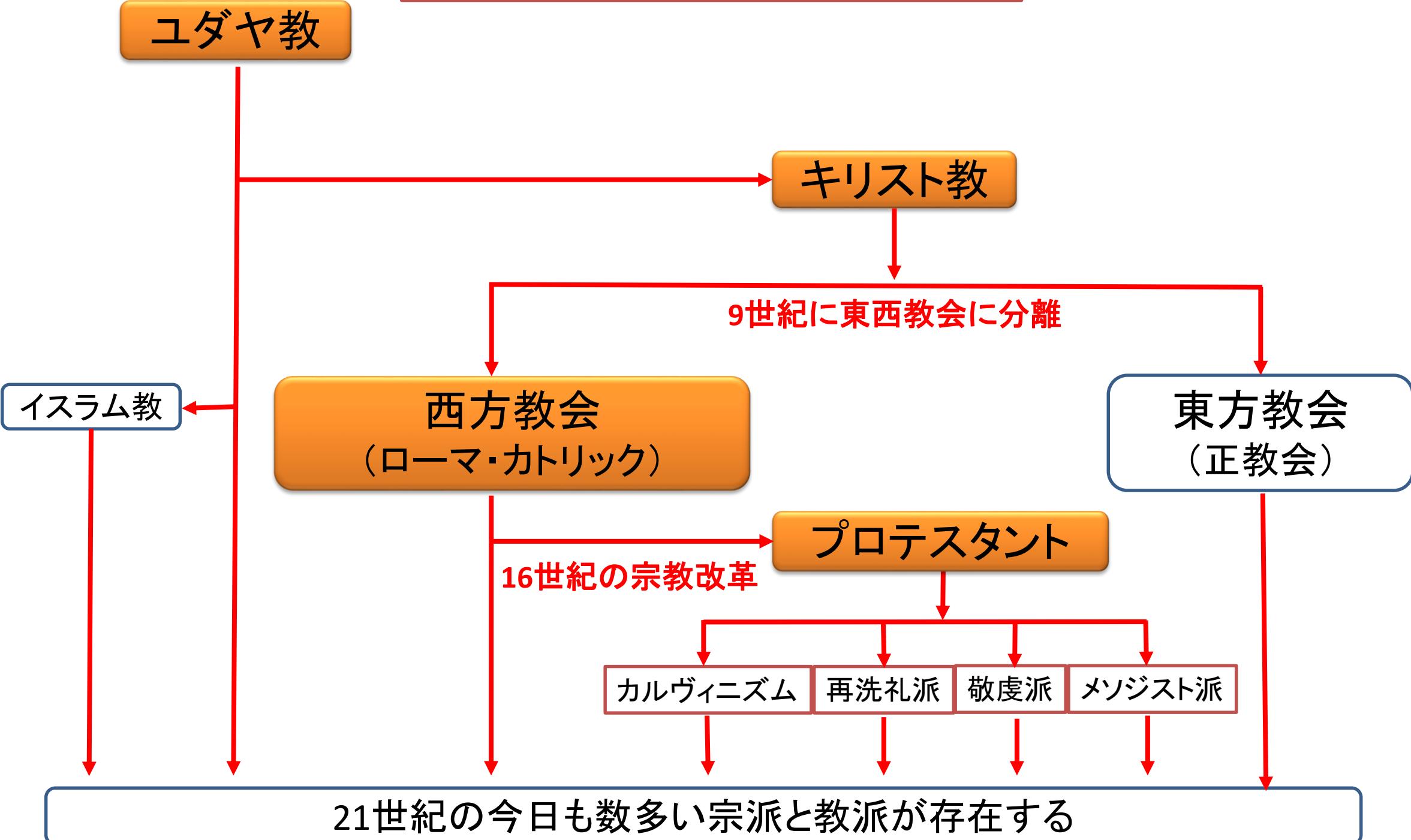
「次の問い」

営利活動を倫理的義務、すなわち「天職Beruf」とみなすような思想はどこにその源泉を求めうるか。

宗教改革

「beruf」
「二重予定說」

3 キリスト教の分裂と宗教改革



宗教改革

(1) キリスト教

キリスト教は、ユダヤ教の内部から、ナザレのイエスによる一異端運動として発生した。パウロは、ユダヤ教の唯一神觀と合理的日常倫理を引き継ぎ、割礼など、ユダヤ教独自の識別儀礼は廃棄して、「世界宗教」への道を開いた。

(2) ローマ・カトリック教会

ローマ・カトリック教会は、ローマ法とローマの官職概念を継受し、…「教皇」の権威を「官職カリスマ」として確立し、司教・司祭・助祭などの聖職者を、教皇の補佐幹部として「官僚制」的に組織し、「修道士」も、首尾よく「修道院」に統合した。

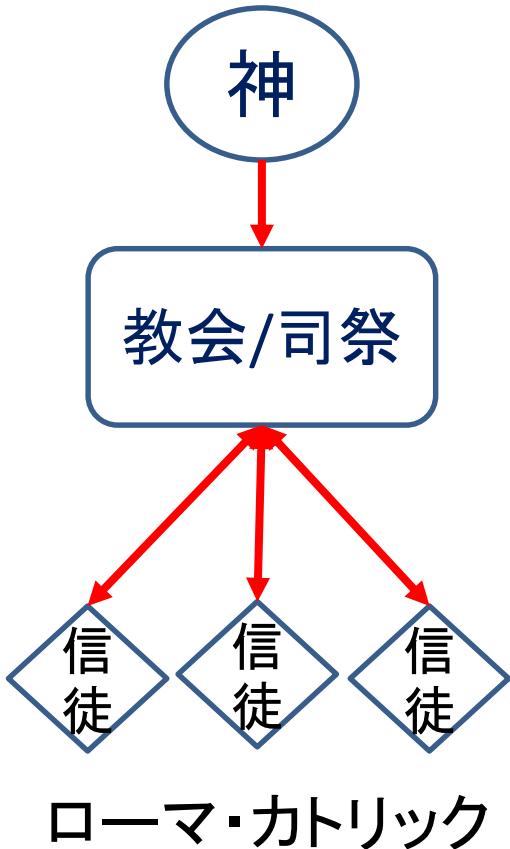
(3) プロテスタント

中世のカトリック教会の世俗化が行き過ぎ、宗教としての機能を十分に果たせなくなつたことに対抗して登場してきたのがプロテstantである。「信仰によってのみ生きる」とするプロテstantからすれば、カトリックの「秘蹟Sakurament」や「免罪符」は「神強制」(=「呪術」)にすぎない。つまり、信徒を「罪、悔い改め、懺悔、赦免、また新たな罪、悔い改め、懺悔、赦免…」という日常の循環に戻してしまい、いわば「有害なまやかし薬」として、拒否された。

折原浩『マックス・ヴェーバーとアジア 比較歴史社会学序説』平凡社、2010年、146-152頁。

(引用の際は原文の一部を修正した)12

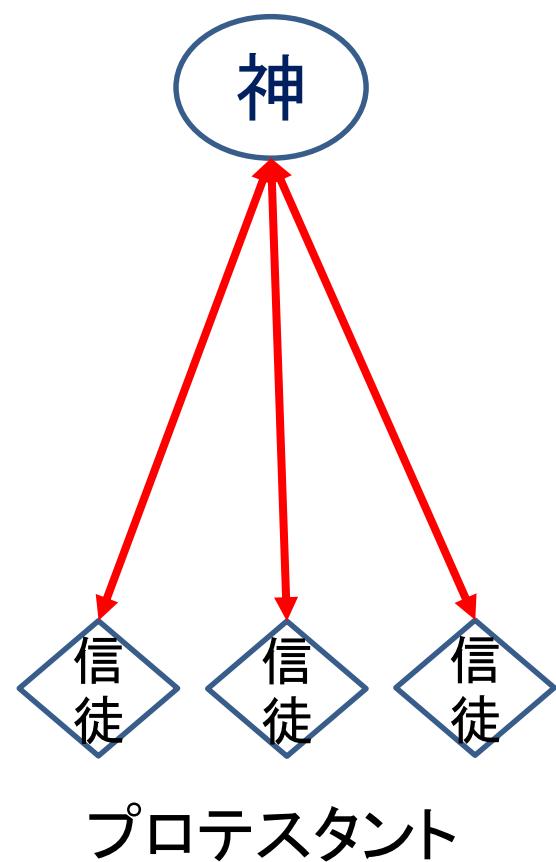
宗教改革



マルティン・ルター
(Martin Luther)
1483-1546



ジャン・カルヴァン
(Jean Calvin)
1509-64



- ・プロテスタンティズムは、人々が現に生きる「この世界」を栄光化することを断然拒否する。このラディカルな現世否定がカトリックと決定的に違う特徴でもある。
- ・ウェーバーによれば、「宗教改革は、教会の支配を排除したのではなく、別の形態による支配に変えた。すなわち、家庭生活と公的生活の全体にわたる厳しく厄介な「規律」を要求した。宗教改革者たちが当時批判したのは、人々の生活に対する宗教と教会の支配が多すぎるということではなく、むしろそれが少なすぎる、という点であった。」

(『プロテstanティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波文庫、17-18頁)

3 ルターの天職觀

ルターも中世的な觀念に捕らわれていたことに変わりないが、ルターの独自性は以下の点にあった。

「各人の職業がいかなるものであれ、その職業が合法的なものである限り、各人がその職業に就いて勤労する労働形態は、人が神に奉仕する唯一の形態である。神に仕えるまさに唯一の最良の方法は、各人の職業労働を完璧に果たすことである」(ルター「ドイツ国民のキリスト教的貴族にあたえる」)

ルターによってはじめて、世俗的な職業に「神から命じられた使命、すなわち天職」の意義をみとめ、職業労働に人間の宗教倫理的な枠付けがなされたことは、特筆すべきである。こうして、ルターは、中世カトリックの思想を支配した世俗生活蔑視を打ち破った。その意味で、ルターの教説は革命的であり、実に重大な役割をはたしたもの、といわなければならない。

このように、ルターの教説は、労働が宗教的な威厳をもって前進する出発点である。同時に、近代(労働思想)への扉は、「宗教改革」期に、ルターの手により、はじめて決定的に押し開けられたのであった。

4 禁欲的プロテスタンティズムの天職倫理

① 営利活動での資本増大を「天職」とみなすこの思想は、世俗の労働を「天職Beruf」と訳したルッターの宗教改革の精神に由来する。彼は、従来修道士にしか通用しなかった「天職」の論理を世俗の労働に適用した。しかし世俗労働を「天職」とみなすだけでは、「資本主義の精神」がもつ、資本の増大へひとびとを絶えず駆り立てる起動力は生まれない。それではその要因はどこに求められるか。

その答えがプロテstanティズムの「現世内禁欲」思想である。

② 禁欲的プロテstanティズムの主な担い手

(1)カルヴィニズム、(2)敬虔派、(3)メソジスト派、(4)再洗礼派系の教派、に分けられる。そのうちでも、カルヴィニズムがいちばん首尾一貫していて、「禁欲」の宗教的「動機」づけを解明(理解)しやすい。

4-1 カルヴァニズムの「二重予定説」と「合理的禁欲」

- ①「二重予定説」は、「全知全能の超越的人格神が、ひと握りのキリスト教信者を選んで、来世における『永遠の生命』を予定し、残余の者は『滅びの群れ』として『永遠の死』に予定している人間は、神のこの決定を、いかなる信仰や善行をもってしても覆せない（覆せるとしたら「人間が神を支配する」「背理」をおかす）ばかりか、神のこうした予定の理由を詮索することすらできない（できるとすれば、人間が神と対等な立場に立ち、人智をもって神慮を裁くことになる）」という、神中心の峻厳な教理である。
- ②カルヴァン派信徒のひとりひとりは、秘かに「この自分は『永遠の生』に選ばれているのか、それとも『永遠の死』に捨てられているのか」という不安に駆られる。しかも「牧師も助けえない、聖礼典も助けえない、教会も助けえない、神さえも助けえない」とすれば、ひとりひとりは「内面的孤独化の感情」とともに内心の苦悶に絶えず苦しまれることとなる。

【参考】「ウェストミンスター信仰告白」(1647年)

**カルヴァンの二重予定説は、『キリスト教要綱』(1543)ではじめて展開された

「ウェストミンスター信仰告白」(1647年)

第9章(自由意志について)第3項

人間は罪の状態への墮落によって、救いをもたらすべき靈的善へのすべての意志能力を全く喪失してしまった。従って生まれながらの人間は、全く善に背反し罪のうちに死したもので、みずからの力で悔い改めあるいは悔い改めにいたるようみずから備えることはできない。

第3章(神の永遠の決断について)第3項

神はその栄光を顯わさんとして、みずからの決断によりある人々…を永遠の生命に予定し、他の人々を永遠の死滅に予定し給うた。

第5項 神は人類のうち永遠の生命に予定された人々を、世界の礎のすえられぬうちに、この永遠にして不变なる志向と、みずからの意志の見ゆべからざる企図と専斷にもとづいて、キリストにあって永遠の栄光に選び給うた。これはすべて神の自由な恩恵と愛によるものであつて、決して信仰あるいは善き行為、あるいはそのいずれかにおける堅忍、あるいはその他被造物における如何なることがらであれ、その予見を条件あるいは理由としてこれを為し給うのではなく、かえってすべて彼の栄光にみちた恩恵の讃美たらしめんがためである。

第7項 神はみずからの被造物に対する主権に栄光あらしめるため、聖意のままに恵みをあたえ、あるいは拒み給う測るべからざる意志にしたがい、人類の残余の人々を看過し、彼らをその罪の故に恥と怒りとに定め、こうした彼の栄光にみちた義の讃美たらしめることを喜び給うた。

第10章(有効なる召命について)第1項 神は生命に予定された人々、しかも彼らのみを、みずから定めかつ善しとし給うた時期に、みずからの言と靈をもって有効に召命することを喜び給う。

4-2 カルヴィニストの心理と生き方

二重予定説は一見すると、「神に捨てられている」と思った人は、「もうなにをしても始まらない」という宿命論か、または「神に選ばれている」と信じた人は「なにをやってもかまわない」という「無規律主義」という消極的で、無気力な「投げやりな」生き方に陥ってもよさそうなのに、実際に生じた帰結は、能動的な自己審査と自己制御による「合理的禁欲」であった。その理由は何であるか。

ある人が神によって救われると予定されているか否かは、人間にはわからない。神のみ知るのである。しかし、神によって救いを予定されている選民は、きっと立派な宗教的生活を送っているにちがいない。宗教的生活を送っているから神によって救われるのではないが、少なくとも神に選ばれるほど的人は、ふだんの生活が立派であろう、と考える。各人は自分が神によって選ばれているかどうかを知ることはできないのであるが、自分が宗教的生活を送っていられるというのは神によって選ばれたものであることの一つの証明になる。自ら善行をしようという意志を持っていることは、その善行によって救われるようになるわけではないが、救われていることの証しであると、自らを納得させることができる。

このように、カルヴィニズムにおいて、かつての「神の選民だ」という信仰が壮大な復活を遂げることとなった。

4-3 世俗内禁欲の実践

①カルヴァン派の「牧会」でなされた二つの勧告

「その一つは、誰もが自分は選ばれているのだとあくまでも考えて、すべての疑惑を悪魔の誘惑として斥ける、こうしたことを無条件に義務づけることだった。自己確信のないことは信仰の不足の結果であり、したがって恩恵の働きの不足に由来すると見られるからだ。…いま一つは、こうした自己確信を獲得するための最もすぐれた方法として、絶えまない職業労働をきびしく教えこむということだった。つまり、職業労働によって、むしろ職業労働によってのみ宗教上の疑惑は追放され、救われているとの確信が与えられる、というのだ。」(178-179頁)

②このように、カルヴァン派の人びとにとっては、「職業労働」は、まさに「神の栄光を増すための働き」「悪魔の誘惑に対する戦い」という意味をもつことになった。そこから、日常生活は、徹底的に合理化され、快樂を一切放棄して職業労働にいそしむという厳しい生活態度が生み出される。かつて修道院にあった「祈り、かつ働け!!」という禁欲的生活態度は、そのまま「世俗内」に移され、「世俗内禁欲」として「職業労働」が聖化されるにいたった。

4-4 「世俗外禁欲から世俗内禁欲へ」

これに関して、ウェーバーは次のように述べている。

「われわれの研究にとって決定的な意味を持つ点は…・どの教派においてもつねに、**宗教上の「恩恵の地位」を現世から信徒たちを区別する一つの身分 (status)と考え**、この身分の保持はなんらかの呪術的＝聖礼的な手段でも、懺悔による赦免でも、また個々の敬虔な行為でもなくて、独自な行状による確証、によってのみ保証されうるとした。

…この禁欲的な生活のスタイルは、神の意志に合わせて全存在を合理的に形成するということを意味した。しかも、この禁欲は救いの確信をえようとする者すべてに要求される行為だった。こうして、宗教的要求にもとづく聖徒たちの、「自然の」ままの生活とは異なった特別の生活は—これが決定的な点なのだが—もはや世俗の外の修道院ではなくて、世俗とその秩序のただなかで行われることになった。このような、**来世を目指しつつ世俗の内部で行われる生活態度の合理化**、これこそが禁欲的プロテスタンティズムの天職観念が作り出したものだった。(286-287頁)

4-5 「禁欲的プロテスタンティズム」の果たした役割

「近代資本主義」の「搖籃をまもった」のが、「禁欲的プロテスタンティズム」である。

「ピュウリタニズムの人生観は、その力が及びえたかぎりでは、どのようなばあいにも、市民的な、経済的に合理的な生活態度へ向かおうとする傾向—これが単なる資本形成の促進よりもはるかに重要なことはもちろんだ—に対して有利に作用した。そして、こうした生活態度のもっとも重要な、いや唯一の首尾一貫した担い手となつた。ピュウリタニズムの人生観は「経済人」の搖籃をまもつたのだつた。」(350-351頁)

5 「合理的禁欲」の普及と「(近代)資本主義の精神」への転態

①禁欲的プロテスタントたちは「合理的禁欲」という態度(厳正な自己審査・自己制御による計画化・合理化)をもって、日常の事業「経営」を行ない、「救いの確かさ」を追及した。具体的には、「薄利多売」の原則を実行して、合法的な利益が手に入れば、それは市場を介して多くの買い物手(「隣人」)に有用な生産物を提供し、それだけ「隣人愛」を実践した「証」とも解された。そのうえ、そうして取得された利益は、私的消費への充当も必要最小限に切り詰めて、「営利機械」として「神から託された」「使命としての」事業の拡張に、ひたすら再投下された。これに関して、ウェーバーは次のように述べた。

「近代資本主義の精神の多数の構成要素と同じく、一つ一つの根は中世まで遡るが、しかし禁欲的プロテスタンティズムにいたって、**はじめて自己の一貫した倫理的基礎を見出したのである**。それが資本主義の発展に対してどんな意義をもったかはきわめて明瞭だ。」(339頁)

「プロテスタンティズムの世俗内禁欲」は消費を圧殺した。消費の圧殺と
営利の解放から必然的に帰結してくるのは「禁欲的節約による資本形成」
にほかならない。…ここにおいて、資本の原始的蓄積がおこなわれるこ
とになる。(344-345頁)

- ②労働や事業の「合理化」とともに、激しい競争が始まる。そのため牧歌は影をひそめ、巨額の財産は獲得されても利息目当ての貸付には向けられずに、後から後から事業に投資され、のんびりした、気楽な生活は失せはてて、厳しい冷静さがそれに代わった。
- ③こうして、カルヴァン派信徒の事業家は、「市場における競争」でも、それだけ優位に立てる。そうなるとカルヴァン派信徒以外の同業者（「市場利害関係者」）も、市場で淘汰されなければ、信徒同様に計画的・合理的な態度を取らざるを得ない。こうした「競争をとおしての強制」によって、合理的禁欲が、信徒の範囲をこえても普及していった。

5-1 「意図せざる結果」

カルヴァンやカルヴィニズム、およびその他の「ピュウリタン」諸信団(ゼクテ)の…諸教団の建設者あるいは代表者たちが、われわれのいう「資本主義精神」の喚起を何らかの意味で生涯の目的としていたとわれわれが予期しているなどと、決して解されてはならない。彼らのうちの誰かが、世俗的財貨の追及を自己目的とし、それに倫理的価値を認めた、などというふうにはどうてい考えがたい。…彼らの生涯と事業の中心は魂の救済であり、それいがいにはなかった。彼らの倫理的志向やその教説の実践的影响もすべてここに深く根ざしており、したがって純粹に宗教的な動機からの帰結にほかならなかつた。それゆえわれわれは、宗教改革の文化的影響の多くが…改革者たちの事業から生じた予期されない、いや全然**意図されなかつた結果**であり、しばしば、彼ら自身の念頭にあったものとは遙かにかけはなれた、あるいはむしろ正反対のものだった。」(133-134)

このように、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、あらゆる欲望を肯定する近代資本主義が、宗教的理想的実現のためにあらゆる欲望を犠牲にしたプロテスタントたちの禁欲から生まれたという壮大な歴史のパラドクスを描いているのである。

5-2 「(近代)資本主義の精神」の帰結と「二重予定説」の機能変換

マックス・ウェーバーは次のように述べている。

「フランクリンの道徳的訓戒はすべて、正直は信用を生むから有益だ、時間の正確や勤勉・節約もそうだ、だからそれは善徳だというふうに、功利的な傾向をもっている。こうしたことから、とりわけ次のようなことがらが帰結するだろう。つまり、たとえば正直の外観が同一の効果を生むとすれば、この外観だけで十分で、善徳へのそれ以上の努力は不必要であり、フランクリンの目には非生産的な浪費として排斥すべきものと見えたにちがいない。」(46-47頁)

- ①「(近代)資本主義の精神」は、「時は金なり」という個人原則とともに、「信用は金なり」という対他者原則を、モットーとしているが、…徳目を守る「見せかけ」で同一の効果が達成されれば、それだけでよく、それ以上は「無益」「目的非合理的」と感得されてくるでしょう。…そうなるといつしか(「見せかけだけでことをすませる」「偽善」や(「目的のために手段を選ばない」「欺瞞」が忍び込み、宗教性ばかりか倫理性までが、薄れてしまう結果となる。

②「二重予定説」の機能変換についていえば、「事業上の成功」が、「神に選ばれている証拠」「神の祝福の印」であるとして、成功した人間に好都合に「正当化」されるばかりか、不成功者・対立者・敵対者は「神の敵」に見立てられ、彼らへの搾取・冷酷・残虐といった非人間的・反同胞的遭遇も、「神意」「神義」に転嫁して「正当化」されるようになった。

③このような状況のなかで登場する人間類型として、ウェーバーは論文の最後を次のような文章で締め括っている。

こうした文化発展の最後に現れる『末人たち*letzte Menschen*』にとては、次の言葉が真理となるのではなかろうか。『精神なき専門人、心情のない享楽人。この無のもの(Nichts)は、人間性のかつて達したことのない段階にまでにのぼりつめた、と自惚れるだろう。』(365-366頁)

④「資本主義の精神」がその宗教的外衣をぬぎ捨てて、その職業倫理は、神の栄光のためにではなく、多くの貨幣利得のための一切の営みを合理化し、それへの全力の傾注という現世的倫理に変貌してゆくのである。つまり、「金銭上の成功」によって「神に選ばれた」(人間性の最高段階にまでのぼりつめた)と自惚れる「精神なき専門人」「心情なき享楽人」がその人間類型である。

マックス・ウェーバーによる 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に関する自己限定

「「資本主義精神」(もちろんここで暫定的に使用するような意味で)は宗教改革の一定の影響の結末としてのみ発生したとか、また、経済制度としての資本主義は宗教改革の産物だなどというような馬鹿げた教条的テーゼを、決して主張したりしてはならない。…ただ問題の「精神」の質的形成と全世界にわたる量的拡大のうえに宗教の影響がはたして、また、どの程度に与って力があったかということ、および資本主義を基盤とする文化のどのような具体的側面がこうした宗教の影響に帰着するのかということだけなのだ。ところで、その場合、宗教改革期における物質的基礎と社会的政治的組織形態と、そしてその時代の精神的内容とが相互におそろしく複雑に影響しあっているという点を考えると、さしあたっては、特定の形態の宗教的信仰と天職倫理との間に、はたして、なんらかの「選択的親和性」が認められるか、また認められるとすれば、それはどの点でか、ということを究明していくよりほかはない。」(135-136頁)

マックス・ウェーバーの「近代形成論」 —まとめに代えて—

マックス・ウェーバーの「近代形成論」

参考文献: 安江孝司『社会学』(法政大学通信教育部、1983=2006)。

①「近代(社会)」は、或る特殊な宗教的に動機づけられた人間的エネルギーの社会的放出の「思わざる結果」として成立した。

- ・カトリシズムの教会主義に対抗したプロテスタンティズムの形成(宗教改革)によってはじめて産み落とされた、という仮説によって、ウェーバーは説明する。
- ・この議論の鍵概念は、「現世内的禁欲主義」である。これが宗教時代の西欧社会を激変させて近代を形成する原動力となつた。

②カルヴァンの宗教改革がルターに発する「beruf(召命:天職)」という純粋に宗教的な観念を世俗的なものへと変容させることによって近代形成の原動力となつたとみなす。

- ・ルターの宗教改革の重要な意義は、「俗なる職業」も「聖なる職業」もどちらも同じように「神の召命としての天職」であるとした点にある。
- ・カルヴァンの教説は、ルター的な天職の観念を「二重予定説(絶対予定説)」にまで昇華させて、労働・経済活動をふくめた人間生活全般を厳格な宗教的動機にもとづく規律(規範)に従うべきであるとした。

③カルヴァニストと宗教的個人主義の誕生

カルヴァンの教説に従った人々(カルヴァニスト)は、世俗の職業に献身した結果の現世的成功をおさめた場合と、その逆の場合の心理的帰結として、自分たちは神が救済すべく予定された人間であるという意識(選民意識)と、自分たちの不成功は天職に対する献身の不十分さのゆえに、神の恩寵をいただけないという意識を生み、いずれのケースにおいても、それ自体が神の「証し」であり、さらに確証を求めざるをえない心理的衝動から、規律に従って一層勤勉に働く労働倫理と節約を旨とする経済倫理が生みだされるかたわら、最終的な救済に向かって人々はいよいよ「孤独な内面的苦悩」(自分たちはほんとうに神によって選ばれているのだろうか。実は選ばれていないのではないかという恐れの意識)を「精神の荒野」の中に一人ひとりがいわば孤立無縁のかたちで、生み落とすのであった。**救済を教会によってではなく、独立独歩の一人ひとりの人間が、その精神によってのみ果たす**という「宗教的個人主義」の成立がここにみられることとなる。

④カルヴァニズムの社会思想史的意義

この個人主義が、規律、勤勉、節約を旨とする「労働・経済」活動に永続的な正当性を決定的に与えることとなった。カルヴァニズムの社会思想史的意義は、実にこの点にこそある。

これは一つのすぐれて自己否定の倫理である。そして、このような宗教的に動機づけられた社会的生活態度は、実践活動から、実はのちの資本主義、世俗主義、理性主義、個人主義、合理主義等など「神々を殺した近代」(ニーチェ)を特徴づけるあらゆる特性の生成発展が逆説的にみられることになる。端的に、「近代」とは、まさにカルヴァニズム(プロテスタンティズム)の歴史的帰結として、だが、カルヴァニストの「思わざる結果」というかたちをとつて生起した。

非合理による合理化

- ・ウェーバーの近代形成論のポイントは逆説的な発展である。非合理を媒介にして自律的で形式的な合理化を生んだ、こうした逆説的な発展を描いた。つまり、宗教的熱狂という非合理的な宗教改革が結果として世俗内禁欲主義とその「思わざる結果」として近代資本主義を生み出したとされる。
- ・この逆説的発展への着眼は、さらに宗教が科学や資本主義を生み出したがそのことで逆に宗教が否定されてしまうという逆説の着眼へ拡大していくのである。